

至 誠 惻 怛(しせいそくだつ)

王 陽明

これまでマネージャー会議や所属長会議等の機会に、私から職員の皆さんにお伝えしたいことを、所属長さんを通じてお話してきました。こうした中、令和5年3月に当財団のホームページがリニューアルされましたので、これを機に「理事長メッセージ」という形でホームページに掲載することで、私の所信などを職員の皆さんに直接お伝えすることとしました。今回は、その第1回目ということになります。

さて、冒頭の言葉ですが、陽明学の祖、王陽明の一節で、その意味するところは、「まごころ(至誠)と、いたみ悲しむ心(惻怛)があれば、やさしく(仁)なれる」ということとされています。

ちなみに、この言葉は、幕末の備中松山藩(現在の岡山県高梁市)の参政(事実上の藩のトップ)であった山田 方谷(やまだ ほうこく)が、越後長岡藩の家老で北越戦争を指揮した河井 継之助(かわい つぎのすけ)に贈った言葉としても知られています。

山田は、膨大な借金で絶望的な財政状況にあった備中松山藩の財政再建を短期間に成し遂げただけでなく、農民を軍の主体とする農兵制を導入するなどの藩政改革をも成し遂げたのですが、その高名を聞きつけた河井は、幕末の一時期山田に師事していたのです。余談ながら、河井を主人公とする司馬遼太郎の小説「峠」にも、この間の経緯(小説なので全てが史実とは限りません)が詳しく描かれています。

山田方谷は、おそらく日本史の教科書に取り上げられていないと思われ、全国的な知名度もそれほど高くないかもしれませんが、幕末の時代背景の中にあって、その思想や生き方は、混迷した現代を生きる我々から見て大いに感銘を受けますし、ビジネスや仕事の面からも参考になる面が多々あります。

山田が河井に送ったというこの「至誠惻怛」という言葉を、仕事の視点から見れば、自分に今与えられた仕事に「まごころ(至誠)」を持って精一杯取り組み、職場の仲間が苦衷にある時などに「いたみ悲しむ心(惻怛)」をもって接するということであり、これはまさに職業人の基本的な姿勢として、一つの理想的姿ではないかと思われまふ。日頃の我とわが身を顧みて、自分が十分にできているかについては、甚だ心もとないところもありますが、これからもこの姿勢だけは堅持していきたいと思っています。

ところで、現代は、セクシャルハラスメントやパワーハラスメントをはじめ、様々なハラスメントに満ちています。ハラスメントが起きる要因は様々であり、複合的な面もあることから、あまり単純化することは良くないとは思いますが、ハラスメントを行う者には、少なくとも「まごころ(至誠)」と相手方を「いたみ悲しむ心(惻怛)」がともに欠けていることだけは確かだと思ひます。

また、孔子は論語の中で、「仁」について、「己の欲せざる所は人に施す勿(な)かれ」と述べています。物事の善悪や条理は踏まえつつ、相手の気持ちや立場に立って事態に対処することができるかどうか、それは、ハラスメントの防止だけでなく、職場の人間関係やお客様への対応等にとっても、とても大切な姿勢だと思ひます。

(文中敬称略)

令和5(2023)年4月



一般財団法人 かながわ水・エネルギーサービス
理 事 長 松 井 聡 明